テーマ：

りりこのチカラでつながる食育！
～学校・家庭・地域～

福島県
会津若松市立
一箕小学校
湯田先生・二瓶先生

この活動の特徴

「凛々子」活用のポイント①

中庭を畑として整備するところからの
栽培活動にチャレンジ

「凛々子」活用のポイント②

家庭と地域も巻き込んで栽培し、
給食や模擬店で活用

活 動 の ね ら い

- 畑作りから始まる栽培活動を通し、収穫の難しさや喜びを体験させる
- 収穫した「凛々子」を給食や模擬店で食材として使うことで感謝の心を育てる
- 活動の様子を地域に発信することで、食育指導への理解や関心を高める

活 動 の 概 要 と 流 れ

対　象　学　年　：　給食委員会５・６年生（２４名）
実　践　期　間　：　４～１１月

時期	学習活動
４月	花壇を畑にするため、草むしりをして土と肥料をいれ準備
	「ひとみ農園」と名付け、手作りした看板を設置
	定植、観察開始。その都度学校 HP でレポートする
	余った苗は抽選会で当たった児童が家庭で育てることに
７月	「凛々子」が赤く色づきはじめる。初収穫
	家庭で栽培した児童が観察日記や作文を書く
７月	給食の（ﾐﾈｽﾄﾛｰﾈ・ﾄﾏﾄと卵のｽｰﾌﾟ・元気ｶﾚｰなど）に「凛々子」を使用
８月	地域の野菜加工業者に依頼し、凛々子のレトルトパックを作る
１０月	文化祭で「凛々子」を使ったカレー丼の模擬店を出店
１０～11 月	「凛々子」の実を希望者にプレゼントし、レシピを募集
	集まったレシピを給食にしたり、給食だよりで情報発信

ここがポイント！取組の工夫と実践の成果

家庭と地域を巻き込んだ食育活動を目指して

本校は児童数 700 名近くと、大規模校で周囲は住宅や商業施設に囲まれた環境にあります。食育指導にも力を入れていますが、全家庭を巻き込んだ栽培活動はなかなか難しいのが現状です。そこで、５・６年生の給食委員会での活動の１つとして凛々子の栽培活動を取り入れ、児童だけでなく家庭や地域にも食への関心と理解を高めてもらう、“つなぐ食育”にチャレンジしようと考えました。

しかし、本校には畑がありません。そこでいつも児童が休み時間に遊んでいる中庭の花壇の一部を畑にすることにしました。草をむしり、耕して土と肥料を入れて凛々子の畑を準備しました。学校名の「一箕」から「ひとみ農園」という名前を付けて、看板も手作りして立て、凛々子を定植し観察をスタートしました。

たくさん穫れた凛々子は給食の食材に

畑に植えきれなかった凛々子は希望者にプレゼントすることにすると、多数の希望者が集まり、抽選に当たった児童が家庭に持ち帰りました。苗には家庭で育てた凛々子を使って作った料理のレシピを紹介してほしい旨のメッセージカードを添付しました。

夏休みにたくさん収穫した凛々子は冷凍して保存するほかに、地域にある野菜の加工店にお願いし、レトルトパックに加工してもらい、2 学期の給食や 10 月の文化祭の模擬店の食材として使用できるようにしました。

2 学期になり、保存した凛々子を給食に使いました。「ミネストローネ」、「りりこの元気カレー」など、いつもよりも赤い色が鮮やかでおいしいとの意見が多くでました。

文化祭で「真っ赤なりりこカレー丼」の模擬店を出店

10 月に開催された文化祭で「真っ赤なりりこのカレー丼」を模擬店で販売。これまで凛々子を使った食育活動に興味を持ってくださった家庭や地域の皆さんに凛々子を味わっていただくことができました。

また、10 月になっても凛々子の実たくさん収穫できたので、希望者に持ちかえってもらい、家庭で調理したレシピを募集しました。集まったレシピは給食だよりやホームページでも紹介しました。

先生から一言！実践を通して

凛々子の栽培を通して児童委員会の活動が活発化し、積極的な発言や活動が見られるようになりました。特に、身近な中庭で栽培したことにより、給食委員以外の子どもたちの関心も集めることができました。凛々子が給食の食材となったり、文化祭の模擬店のメニューになったりしたことで、食の安心・安全について体験を通して実感させることができました。

本校のような大規模で、かつ畑の無い学校でも凛々子のチカラと教師と児童のアイデアにより、栽培活動を通して、全校生、全家庭、さらには地域へと活動を広げていく“つながる食育”ができたと思っています。

受賞理由

大規模校の中でこの食育活動を知ってもらうために、給食委員会が自発的に行動しているところに熱意を感じました。目に留まりやすい中庭での栽培や、地域のお店も巻き込みペースト保存にする工夫、ＨＰ・給食だよりに活動内容と募集したレシピの掲載、文化祭の模擬店販売などアイデアが光っています。